

# 資料紹介「医事新報」

島岡 真

## はじめに

ここに紹介する「医事新報」は本学(医学校)最初の雑誌であるばかりか、我が国初期の医学雑誌に属するものである。ところが、その存在が一般に知られていないのみか、その所在も当医学部の図書館のみにしか確認されていない。そこで、この誌面を借りて、総目次等を作成・報告することによって、今後の大学史及び医学史の研究に、些かなりとも役立つことを願うものである。

作成に使った「医事新報」は医学部分館に所蔵する第1号～50号であり、欠号の51号～54号に相当する部分は、

同分館所蔵の医事新報抄録「断訟医学」によっている。

各号の目次は、論題だけの簡略なものであるが、ここでは、本文中で判るものは著訳者名とその著作の種類を論題の後に追記してある。又、抄訳で原著論文等が確認できたものは「」で、著者、論題、掲載誌、年巻号頁が補記してある。さらに、11号から連載される Roretz の断訟医学講義は、各号の区切りが章立てと一致せず、同一章名が連続するので、各号の内容区別を明らかにするため、本文によって章・節を「」で補った。

## I 「医事新報」総目次

第1号(明治11年7月28日)○規尼涅発疹之説…バウエル氏の抄訳

[Bauer / Ueber Chinin-Exanthem. (Berliner Klin. Wochenschr. 1877 (50); 733)]

○亜苦涅之説…尼邁依児氏及び措設氏の説

○胃管中異物之大動脈穿孔ヲ伴発スル者…アッセンボルン氏の鈔訳

[Aschenborn / Aus der inneren Abtheilung von Bethanien. Ein Fall von Fremdkörper des Oesophagus mit Perforation der Aorta. (ibid. 1877 (50); 725-726)]

第2号(明治11年8月23日)○胃管中異物之大動脈穿孔ヲ伴発スル者〈前号続〉

○妊娠診断的徴候 第一編 妊娠ノ各種徴候…シロイデル氏著産科書抄訳

○縊死人精液濁洩之説…ミルレルベニンガー氏述、鈔訳

[Müller-Beninga / Ueber die Samenentleerung bei Erhängten. (Berliner Klin. Wochenschr. 1877 (33); 481)]

○冷水皮下注入之治験…後藤新平述

第3号(明治11年9月28日)○妊娠診断の徴候 第二編 妊婦ノ分離診断〈前号続〉

○颯病ノ治験(本院録事)…後藤新平述

○定時限ノ胃痛症ニ規尼涅偉功ヲ奏スル治験(名古屋鎮台病院之紀事)…横井信之述

第4号(明治11年10月28日)○痘痕ノ顔面ニ生ズルヲ防グノ新法…ローレツツ述

○睾丸腫瘤ノ心臓ニ達スル者…ローレツツ述

○妊娠診断の徴候 第三編 初妊及重妊ノ診断〈前号続〉

○腸窒扶斯兼胸膜肺炎之治験…後藤新平述

第5号(明治11年11月28日)○睾丸腫瘤ノ心臓ニ達スル者〈前号続〉

○「ロキタンスキー」氏略伝

○重炭酸曹達応用ノ新説…ローレツツ述

○腸窒扶斯兼胸膜肺炎之治験〈前号続〉

○全肩胛骨及上臂骨頭骨膜下裁除之良治験(寄書)…霜田長泰(好生舎)記述

第6号(明治11年12月28日)○銃傷之奇症…コーノル氏の鈔訳

「伯靈府医事年報 第2編 外科門」

○腸窒扶斯兼胸膜肺炎之治驗〈前号続〉

○妊娠診断的徴候 第四編 妊娠時期ノ鑒識〈4号の続〉

○紀事一則(八歳女子ノ妊娠寄話)…虎岩武

○麻拉里亜症ニ於ケル黒白症及此機ニ由テ発スル網膜溢血ノ珍話「マッケンヂー氏の所説」

○水治法ニ於ケル特異性ヲ論ズ「アンエル氏」

○創傷後ニ発スル失気ノ説「エンゲル氏」

○「ウルチガリヤ」ニ硫酸ヲ用ヒシ治驗

第7号(明治12年1月15日)○祝詞…石井栄三

○「クループ」及「ヂフテリチス」ノ説

附・摺設氏實際医論ノ説…グリーンハウ氏の鈔訳

「伯靈府医事年報」

○胃潰瘍之説「コロンボー氏」

○痘瘡初期ニ種痘ヲ行フノ説「ヴェルチ氏」

○妊娠診断的徴候〈前号続〉

第8号(明治12年2月15日)○急性石炭酸中毒ノ一症

[Max Oberst / Ein Fall von acutem Carbolismus. (Berliner Klin. Wochenschr. 1878 (12); 157-160)]

○蜂螫中毒ノ説「ハイドニッヒ氏」

○甘油之説「カチロン氏」

○妊娠診断的徴候 第四編 複胎之診断〈前号続〉

○米国医学士会議演述(寄書)・・小島政憲(鎮台病院)鈔訳

○ペテルスブルクノ病理解剖「リュドニウ氏」

○ピリスニウイス氏ノ検査ニ係ル肺血管ノ梗結

第9号(明治12年10月28日)○急性石炭酸中毒之一症〈前号続〉

○妊婦診断的徴候 第五編 胎児生死之監別〈前号続〉

○米国医学士会議演述(寄書)〈前号続〉その二

・アフハナシーフ氏ノ検査ニ係ル水脉腺内ニ於ケル結核ノ發育

第10号(明治12年11月15日)○急性石炭酸中毒之一症〈前号続〉

○検内鏡

○腺病性角膜斑翳ニ沃度保兒膜ヲ用ヒシ治驗…亀谷巖

第11号(明治12年11月19日)○断訟医学…「ローレッツ講義」

第一編 提要

通編

第1 断訟医学士ニ任ズベキ人ニ就テ論ズ

第2 断訟医事検査施行ノ方式ニ就テ論ズ

第12号(明治12年12月)○断訟医学へ前号続 第一編通論第2

・断訟医事検査施行ノ方式

第13号(明治13年2月15日)○断訟医学へ前号続 第一編通論第2

・断訟上医事記録ノ式ヲ論ズ

・断訟上死体検査法ヲ論ズ

○新發明ノ貯液(附録・老烈への来書) 「ウィッケルスハイム氏説」

第14号(明治13年3月10日)○断訟医学へ前号続 第一編通論第2

・断訟上死体検査法ヲ論ズへ続章

・断訟上解屍ニ於ケル医士ノ法式ヲ論ズ

・断訟上毀傷検査ヲ論ズ

第15号(明治13年3月25日)○断訟医学〈前号続 第一編通論第2〉

・断訟上毀傷検査ヲ論ズ〈続章〉

○外傷性敗血症治験…加藤敬

第16号(明治13年5月20日)○断訟医学〈前号続〉

第二編 各論

其一、断訟上精神的検査

○外傷性敗血症治験〈前号続〉

○骨膜下膿瘍ノ治験…亀谷巖

第17号(明治13年5月30日)○断訟医学〈前号続 第二編其一〉

・裁判上精神学ノ實際施行ヲ論ズ

第18号(明治13年6月20日)○断訟医学〈前号続 第二編其一〉

・裁判上精神学ノ實際施行ヲ論ズ〈続章〉

第19号(明治13年6月30日)○断訟医学〈前号統 第二編其一〉

・裁判上精神学ノ實際施行ヲ論ズ〈統章〉

第1 精神感動

第2 精神柔弱

○婦人ノ瘋癲ニ於ケル不眠症ニ龍腦ノ功有ルノ經驗…ストイル氏〔維也那府医事毎週新聞所載〕

○女兒外陰部象脚症ノ治驗…ペー・ルーケ氏〔維也那府医事毎週新聞所載〕

第20号(明治13年7月20日)○断訟医学〈前号統 第二編其一〉

「・裁判上精神学ノ實際施行ヲ論ズ〈統章〉

第2 精神柔弱〈前号統〉

○悪性猩紅熱ノ一症ニ水楊酸ヲ用ヒシ治驗…ネウドン氏〔維也那府医事毎週新聞所載〕

○肺臟脱出ヲ兼子タル胸部刺傷ノ奇異ナル治驗…ア・フォイルケル氏〔維也那府医事毎週新聞所載〕

第21号(明治13年7月30日)○断訟医学〈前号統〉

「・裁判上精神学ノ實際施行ヲ論ズ

第2 精神柔弱〈統章〉

○肺臟脱出ヲ兼子タル胸部刺傷ノ奇異ナル治驗〈前号統〉



第22号(明治13年8月20日)○断訟医学〈前号続〉

「・裁判上精神学ノ實際施行ヲ論ズ

第2 精神柔弱〈続章〉

第3 精神病

○肺臓脱出ヲ兼子タル胸部刺傷ノ奇異ナル治驗〈前号続〉

○膀胱及ビ臍間結締織内ニ刺入セル髮針ノ治驗…ペー・子ツケ氏

第23号(明治13年10月30日)○断訟医学

「・裁判上精神学ノ實際施行ヲ論ズ

第3 精神病〈前号続〉

天 单思瘋癲

其一 宗教的単思瘋癲

第24号(明治13年11月30日)○断訟医学

「・裁判上精神学ノ實際施行ヲ論ズ

其二 自思的単思瘋癲

其三 依剝昆垓兒性瘋癲

其四 花瘋(エロトマニ)

第25号(明治13年11月20日)○断訟医学

「・裁判上精神学ノ實際施行ヲ論ズ

地 鬱憂瘋癲

人 狂暴瘋癲

〔第4 身体疾患ノ精神ヲ犯ス者〕

其一 発育状態ヲ論ズ

甲 春機発動ノ状態

乙 妊娠発育ノ状態

第26号(明治13年11月30日)○断訟医学

「・裁判上精神学ノ實際施行ヲ論ズ

丙 分娩及産辱ノ状態

其二 身体的各疾患ヲ論ズ

其三 精神刺衝或ハ自宰力欠損ニ起由シ偶然来ル所ノ身体状態ヲ論ズ

第27号(明治13年12月20日)○断訟医学

「・裁判上精神学ノ實際施行ヲ論ズ

其三 精神刺衝或ハ自宰力欠損ニ起由シ偶然来ル所ノ身体状態ヲ論ズ(前号続)

〔第5〕偽病(シムラチラン)

第三編

第一章 生殖機能ニ関スル断訟上検査

第28号(明治13年12月30日)○断訟医学

「・生殖機能ニ関スル断訟上検査

第二章 處女ニ就テ論ズ」

第29号(明治14年1月20日)○断訟医学

「・生殖機能ニ関スル断訟上検査

第三章 妊娠及ビ分娩ニ就テ論ズ

第四章 強姦及ビ自然ニ戻レル姦淫ニ就テ論ズ」

第30号(明治14年1月30日)○上顎骨肉腫截除術之治験…後藤新平

第31号(明治14年1月20日)○断訟医学

「・生殖機能ニ関スル断訟上検査

第四章 強姦及ビ自然ニ戻レル姦淫ニ就テ論ズ(29号続)

○愛知県公立病院ニ於テ始テリス的爾氏消毒繃帶ヲ用ヒシ癌腫截除術ノ治驗…加藤敬  
○後藤氏口述利氏消毒繃帶論提要

第32号(明治14年2月28日)○断訟医学

「第四編 裁判上傷殺的検査ノ論

第一章 屍体発頭及ビ其検査法ヲ論ズ

第二章 血痕及ビ之ヲ徴知スル方法ヲ論ズ」

第33号(明治14年3月10日)○断訟医学

「・裁判上傷殺的検査ノ論

第二章 血痕及ビ之ヲ徴知スル方法ヲ論ズ(前号続)

○リス的爾氏消毒繃帶ヲ用ヒシ癌腫截除術ノ治驗(承前)

第34号(明治14年3月25日)○断訟医学

「・裁判上傷殺的検査ノ論

第二章 血痕及ビ之ヲ徴知スル方法ヲ論ズ(前号続)

第三章 損傷ヲ論ズ

第一 損傷ノ区分

甲 繼發狀態

其一 喚死的損傷

○急性燐中毒論ノ附説「伯靈府医事毎週新聞所載 アーフレンケル氏の記事」

第35号(明治14年4月10日)○断訟医学

「・裁判上傷殺的検査ノ論

第三章 損傷ヲ論ズ

其一 喚死的損傷(前号続)

○急性燐中毒論ノ附説(前号続)

第36号(明治14年4月25日)○断訟医学

・裁判上傷殺的検査ノ編

「第三章 損傷ヲ論ズ

其一 喚死的損傷(前号続)

○尋常榮養及發育之論…田野俊貞講述(愛衆社)

第37号(明治14年5月10日)○鬼胎之一症…横井信之(好生舎)

付卵皮異常之説…田野俊貞訳

第38号(明治14年5月25日)○断訟医学

・裁判上傷殺的検査ノ論

「第三章 損傷ヲ論ズ

其一 喚死的損傷(前号統)

其二 不喚死的損傷」

第39号(明治14年6月10日)○断訟医学

・裁判上傷殺的検査ノ論

「第三章 損傷ヲ論ズ

乙 創傷ノ種類及ビ性状

丙 損傷ノ部位

其一 頭部損傷」

第40号(明治14年6月25日)○断訟医学

・裁判上傷殺検査ノ論

「第三章 損傷ヲ論ズ

其一 頭部損傷(前号統)

其二 頸部損傷」

第41号(明治14年7月10日)○断訟医学

・裁判上傷殺的検査ノ論

「第三章 損傷ヲ論ズ

其三 脊椎損傷

其四 胸部損傷

其五 腹部損傷

其六 四肢損傷」

第42号(明治14年7月25日)○断訟医学

第五編 保全物品ノ欠之及ビ過剩ニ因スル健康障害並ニ致死ニ関スル断訟医学上検査ノ論

「第一章 空氣」

○急性燐中毒論之附説(承前)

第43号(明治14年8月10日)○衛生一班浴療法…横井信之著

附海氣療法…後藤新平

第44号(明治14年8月25日)○断訟医学

・保全物品ノ欠之及ビ過剩ニ因スル健康障害並ニ致死ニ関スル断訟医学上検査ノ論

「第一章 空気」

「窒息の原因區別 第2-4」

○道教風儀ノ疾病ニ於ケル感作ヲ論ズ… 田野俊貞稿

第45号(明治14年9月10日)○断訟医学

・保全物品ノ欠之及ビ過剩ニ因スル健康障害並ニ致死ニ関スル断訟医学上検査ノ論

「第一章 空気」

「窒息の原因區別 第5」

○婦女外陰及墮痲疾之論… 田野俊貞訳纂

第46号(明治14年9月25日)○断訟医学

・保全物品ノ欠亡及ビ過剩ニ因スル健康障害並ニ致死ニ関スル断訟医学上検査ノ論

「第一章 空気」

「窒息の原因區別 第6」

○婦女外陰及墮痲疾之論(前号続)

第47号(明治14年10月10日)○断訟医学

・保全物品ノ欠亡及ビ過剩ニ因スル健康傷害並ニ致死ニ関スル断訟医学上検査ノ論



「第二章 飲食

第三章 温

○婦女外陰及腫痲疾之論〈前号統〉

第48号(明治14年10月25日)○断訟医学

・保全物品ノ欠亡及ビ過剩ニ因スル健康傷害並ニ致死ニ関スル断訟医学上検査ノ論

「第四章 熱

第五章 嘔囉叻

第六章 電気

○婦女外陰及腫痲疾之論〈前号統〉

第49号(明治14年11月10日)○断訟医学

第六編 初生児ノ死傷ニ関スル断訟医学上検査之論

「・初生児ノ殺死ヲ論ズ」

第50号(明治14年11月25日)○断訟医学

・初生児ノ死傷ニ関スル断訟医学上検査之論

「・初生児ノ殺死ヲ論ズ〈前号統〉

甲 分娩時ノ障害

○婦女外陰及腫痲疾ノ之論（前号続）

第51号（ ） 54号（明治15年3月<sup>\*</sup>日）欠号 ○断訟医学

・初生児ノ死傷ニ関スル断訟医学上検査之論

乙 分娩時ノ偶発損傷

丙 分娩後ニ偶然起ル所ノ障害

丁 妊婦経過中母体ヲ侵襲スル障害ニ由テ来タル所ノ胎児ノ損傷

第七編 断訟医学上医事検査之論

第八編 中毒ノ死及ビ健康障害ニ関スル断訟医学上検査ノ論

※注 最終号の発行年月は現物で確認されていないが、「愛知医学校及愛知病院第三報告」の明治15年3月の頃に「…医事新報ヲ本月ヨリ当分休刊ス」とある。

## II 「広告」

本校頒行スル所ノ医事新報ハ教師老烈氏病床講義及治驗或ハ欧米ノ医籍及ビ諸種ノ新聞等ニ就テ大ニ刀圭ニ切要ナル事件ヲ抄訳編纂シ以テ遍ク同志ニ報告スル者ニシテ蓋シ衆ト共ニ我ガ医事ノ鴻益ヲ謀ルノ趣旨タリ故ニ各地ノ流行病及ビ風土病等ノ如キ都ベテ衛生ニ関涉スル所ノ諸件ハ伏テ謂フ四方ノ君子速ニ投寄セラレシム

トヲ其裨益アル所ノ論説ハ逐次登録シ以テ新報ノ名ニ負カザランコトヲ欲ス且其報酬トシテ該冊子ヲ呈スヘク  
惠愛ヲ賜ハゞ則チ独リ吾侪ノ幸ノミナランヤ

編者謹白

※注 この「広告」は第35号(明治14年4月)まで、ほぼ毎号の巻頭もしくは巻尾に掲載されている。それ以降  
の掲載はない。

### III 緒言

古人ノ朝聞夕死ヲ可トスル蓋シ其道ヲ学ブノ難キヲ重ンズル故ナリ。今ヤ奎運昌隆文明ノ余沢我ガ医林ヲ洽  
及シ吾侪明リニ乏ヲ本覺教員ニ承ケ幸ニ海外ノ良師ニ親炙スルコトヲ得タリ。然ラバ則朝ニ其道ヲ聴キ夕ニ其  
書ヲ繙キ燈火以テ晷ニ繼ギ学ンデ時ニ之ヲ習ヒ孜々トシテ怠ラザルトキハ何ノ学ガ成ラザラン。何ノ道ニカ達  
セラシヤ。然リ而シテ吾侪ノ非才謏劣ナル苦学シテ尚ホ且ツ善ク忘ル故ニ随聞随録近日ヲ奉務ノ余暇欧米各国  
ノ諸新聞ヲ抄訳シ積ンデ数冊ヲ成スニ至ル。因テ相議シテ曰ク噫々日新ノ学今日ノ新奇トスル所明日既ニ陳套  
ニ属ス。寧ロ机上ノ塵ニ埋メンヨリ如カズ。同志ノ者ニ示シ尚ホ遍ク江湖ノ奇事新説ヲ問ハンニハ偶々校長佐々  
木氏ニ是ヲ謀ル。同氏一諾シテ曰ク自今衛生ノ事業ヲ興張セントシ我校中ニ於テ夙トニ此挙アランコトヲ欲ス。  
今ヨリ本省ノ許可ヲ得速カニ之ヲ鉛板ニ植シ以テ闔国ニ発行セン。公等幸ニ之ヲ勉メヨト是ニ於テ乎日来鈔録  
セシモノニ更ニ将来新鈔スル所ノモノヲ加ヘ稿成ル毎ニ輯メテ小冊子ト為シ医事新報ト名ケ以テ陸続世ニ伝ヘ  
ントス。然ト雖モ吾侪ノ陋筆ヲ以テ綴属スル所固ヨリ疎漏無キヲ保タズ。願ハクバ覽觀ノ諸君指教ヲ賜ヒ共ニ

吾道ヲ裨益シ以テ文明ノ徳沢ニ酬ユルコトアラバ則チ幸甚

明治十一年七月

編者謹誌

## IV 解題

「医事新報」は明治11年から同15年にかけて、全54号刊行された本学最初の学術誌である。最近まで、原本は本学には残存せず、医学部図書館に一宮の浅井病院・森家蔵本の複製を有するのみであった。幸いなことに、当家から昭和62年、医学部史料室開設に伴い、原本の御寄贈を頂いた。しかし、森家にも50号までしか所蔵されて来ず、51号から54号は未だ所在が確認されていない。

「医事新報」の形態は縦16 cm、横10 cm、頁付はなく「葉」表示で、毎号12〜16葉、つまり30頁内外である。1頁の字数は25字の12行、300字。

編輯は田野俊貞、後藤新平、石井栄三の三人により、編輯長は田野俊貞、印刷責任者が石井栄三という分担であった。但し、後藤は9号までの参加で、その間も時として編輯者名から落ちている。10号以降は田野と石井の編輯並びに印刷の分担となるが、22号からは瀧浪図南が印刷責任者となっている。

発兌は最後まで愛知県公立医学校であるが、印刷は1号から31号までは愛岐日報社、32号以降は成文社である。この印刷所は「印刷売弘所」と表示され、別に「売捌所」が列記されている。1号の売捌所は、名古屋では愛知新聞社、片野藤四郎、丸屋善八出店、栗田東平の4ヶ所、豊橋は錚々舎、岐阜が欽風舎の計6ヶ所で開

始している。2号以降は、名古屋は他に8ヶ所、そして、津島、横須賀、一ノ宮、新城、半田、田原、大垣、津、滋賀、大坂、東京(2ヶ所)、金沢、甲府と一挙に拡大して、計29ヶ所を数えることになる。しかし、39号以降は激減して、名古屋の3ヶ所と半田、豊橋、田原の計6売捌所となって、終焉を迎えることになる。

発行部数は定かではないが、当時の医事一般誌である「東京医事新誌」の発行部数が「僅かに二百五十で、三百に仲々上らなかつた」(※参3)ということから類推せざるを得ない。定価は創刊以来5銭で終始している。形態も似通う「東京医事新誌」が7銭5厘だったという。

さてここで、「医事新報」の当時(明治10年前後)における医学雑誌としての存在位置を小野寺氏の論文(※参2)を手懸りに記してみよう。

我が国最初の医学雑誌として、田代基徳編の「文園雑誌」が明治6年6月から5輯が刊行されている。次いで坪井信良編の「医事雑誌」が同年11月から8年12月までの43号の刊行をみる。明治7年には「陸軍医学雑誌」が12年までの11号を、明治8年には、三宅秀編の「医学雑誌」が13年までの11号を刊行している。同年の佐藤尚中編による「順天堂医事雑誌」の刊行は7巻明治9年で終わる。明治10年の太田雄寧による「東京医事新誌」で始めて、後代まで継承される医学雑誌をみることになる。明治11年には「医事新聞」が、同13年には「中外医事新報」が発行される。後者は、先の「東京医事新誌」が米国系医学の紹介を主としたに対して、ドイツ系医学を主眼とした雑誌として始まる。

ところで、当時の各地の医学校(病院)刊行のものに焦点を絞ると、明治2年に W. Willis が東京医学校で講述した「日講紀聞」や、大坂府医学校の Baudwin の同名書も月刊で6冊刊行されている。しかし、雑誌とみなされるものとしては、明治8年の東京医学校発行の「医院雑誌」が最初となる。これは月刊で翌年の11巻で廃

刊となる。9年には大坂府病院から「医事雑報」が刊行されるが、同年の4号で終わっている。同年京都の療養病院から「西医雑報」が翌年12号まで、金沢病院から「医事雑誌」が10年に6号出されているにすぎない。

内容的にみると、「医院雑誌」は Müller, Hoffmann, Dönitz を中心とした、又「医事雑報」は Emerins の講述を主として集録した雑誌である。これに対し、愛知医学校の「医事新報」は Roretz の病床治験や、海外記事の紹介と同時に、各地の流行病、風土病についての報告も主眼とされていた。その内容の実際がどの程度であったかは、今後専門家の検討を期待したい。少なくとも、門外漢が興味をひくのは、先進技術の紹介のみではない、地域を意識した雑誌、ひいてはそのような医療を視野に入れていたということである。

最終号の発行年月については、「総目次」の注記で述べたが、実はそれが54号である確認はされていない。ここでは先の小野寺氏の論文によって、54号とした。但し、その傍証は前記の「断訟医学」によって、51号以降の内容分量が各号の4回分に相当することで、認められると思う。又、章立てとその分量から、51号が「初生児ノ死傷……」の乙丁、52、53号が第七編を、54号が第八編を掲載（各号の分量から推定して他の論文はなかったと思われる）したはずである。そして、この Roretz の断訟医学講義の完結をもって、「医事新報」の休刊を決定したのであろう。

### 参考文献

- (1) 鈴木要吾著 明治時代に於ける本邦医学界の状況 東京医事新誌 昭和13〔医学史研究会資料第1号(1962)〕
- (2) 小野寺俊治・初期の日本医学雑誌〔日本医事新報：(1728) 昭和32〕
- (3) 東京医事新誌 2510(50周年記念号)、昭和2

(4) 大阪大学医学伝習百年史年表 昭和45

(しまおか まこと 附属図書館医学部分館)